KSKP サロン・あべの NO.62

人にやさしい街づくり

一九九一年八月二四日発行（毎日発行）KSKP通巻一七二八号一九八四年八月二〇日第三種郵便認可
発行人＝関西障害者定期刊行物協会＝大阪市城東区中浜二―十―十三緑橋ビル　IP・アド企画気付

サロン・あべの七月の出会い

梅雨明け宣言の出された七月二〇日（土）午後一時～四時、育徳コミュニティセンター研修室において「人にやさしい街づくり」というテーマで、サロンの原田仁が報告を行った。（このレポートは報告内容の概要を原田がとりまとめた。）

■まちづくりということば

「まちづくり」という言葉はあちこちで使われるようになった。人々が生活する「まち」の重要性が理解され関心が高まってきたことによるものであるが、なにかこれからの夢を感じさせるイメージのいい言葉として使われているという感じもある。

「まちづくり」とは自分のまちをいかに住みよくしていくかということである。つまり、まちをつくる主体は基本的にはそこに住んでいる住民である。そして、つくるのは、道路や広場や建物などの「もの」と、まちをつくる「ひと」であり、また、つくるということは新しいものをつくることだけではなく、古いものを守ることによって新しい価値をつくる場合もある。

■人にやさしいまちづくり

人にやさしいまちづくりとしては、「福祉のまちづくり」や「人間主体のまちづくり」などのキーワードがある。

「福祉のまちづくり」はハンディキャップがあっても生活しやすいまちをつくるというノーマラーゼーションの考え方に基づいたものであるが、高齢化社会対策として在宅福祉がすすめられる中で、お年寄りが安心して外出できる生活環境づくりの必要性が高まってきたことから重視されるようになっている。

（参加者に聞きました）

Q　自分のまちは暮らしやすくなっているか？

「車が多くなって暮らしにくくなった」

「以前を思えば車いすもずいぶん外出しやすくなった」

「昼間はよくなったが夜は依然として車イスには不便」

また、「人間主体のまちづくり」は人間性の尊重、人権の尊重があらためて強調されている

という面と、市民（人間）に対して主体性を求めているという面があるように思われる。市民の主体性ということは、まちづくりにおいて「行政だけではできないことが増えてきた」ということで、市民の主体的な協力なしではまちづくりはできないということを示したものである。

■まちづくりの計画

大阪市でもさまざまなまちづくりがすすめられているが、その基本となっているのは「大阪市総合計画」で、昨年の十月に新しいものがつくられたがあまり知られていないようである。

（参加者に聞きました）

Q　自分のまちの総合計画を知っているか

「あることは知っている」

「全く知らない」

総合計画は、行政だけでなく市民にもこのようにしてほしいという、行政計画と市民活動の指針という二面的な性格が強くなっている。これは市民の協力がまちづくりに不可欠だからであるが、市民がまちづくりに参加するためには、計画づくりにも市民の意見が出していくことが必要となっている。

大阪市でも総合計画をつくるためにアンケート、シンポジウム、意見募集など市民参加をいろいろ行ったが、本当に広く市民の声を聞くためにはもっと情報を出していく必要があるし、市民の方も関心をもってアンテナを張っておくが必要がある。

■まちづくりへの参加

まちづくりは「自分のまち」を大切にする気持ちが基本となるものであろう。

（参加者に聞きました）

Q　あなたにとって「自分のまち」とは？

「大阪市」・・・・・・三割

「阿倍野区」・・・・・七割

「校区や町内会」・・なし

Q　あなたは自分のまちに愛着をもっているか？

「おおいにある」・・三割

「少しある」・・・・七割

「愛着はない」・・・なし

まちへの愛着ということからは何、か「感動するもの」をみつけるということも大切である。風景やまちなみだったり、歴史だったり、人とのふれあいだったり、いろいろあるものである。

まちづくりに参加するということは、まちづくりの計画づく

りに参加するということと、地域活動やボランティア活動などの活動として参加することがあるが、いずれにしてもまちを知り、考えて、何をすべきなのか、何ができるのか、それをみんなで決めることが大切である。

そういう意味でサロンというのは、いろいろな問題について考え、話し合う場となっており、考えたことを自分の生活に生かすだけでなく、みんなの問題として取り上げていくことが大切である。サロン紙はみんなに問題を知らせていくという役割を果しており、一歩すすめて反響を起こしていくことが望まれる。まちに愛着をもった人の集まりとして、まちづくりの主体者となることを期待したい。

このあと、まちの問題についてさまざまな意見が出されたが、障害者も外に出ることによってずいぶんまちも変わってきたという体験にもとづいて、「やってみることの大切さ」について多くの意見が印象的であった。

この日の参加者二二名。司会は冨田慶子さん。

《新》なんとかしてェ～な

無言の差別

浜本浩喜

みなさん　こんにちは。

機関紙への登場は、かなり久しぶりですが、今回は私の「なんとかしてェ～な」をお聞き下さい。

七月の例会でも、話に少し出てきたことなんですが、私達障害者の夜の外出について、私が兼々、すごく不思議で腹が立っていることがあります。

外出して夜遅く帰宅する時、たとえば、色々な交通機関、特に電車なんですが、終電自体は、だいたい十二時前後迄は走っているのにそれに接続するエレベーターやエスカレーターは（駅によっても違うのですが）、たいてい九時か十時で完全にストップしてしまいます。おまけに駅員の数が減らされて、場所によって全くの無人になるところも少なくありません。

道路では横断歩道の盲人用オルゴールやチャイムは、八時前後で鳴らなくなってしまいます。そんなことって、すごくおかしいと思いませんか。

たとえ乗る人が少なくても、電車が動いている以上始発から終電までエレベーター・エスカレーターは動かしておくべきだし、夜間は音を小さくしてでも二四時間鳴らしておくべきではないでしょうか？。

これで本当の意味の交通安全が唱えられるのでしょうか？。

私に言わせれば、それは「障害者なんか夜は家でおとなしくしてろ」って言うようなもので、無言の差別ではないでしょうか。

そこのところをもっとみなさんで考えていきたいものですね。

ふれあいお友達

中野君江

世の中の出会いの不思議を身にしみて感じています。若い男女が同じ電車に数回乗り合せているうちに愛が芽生えてゴールインの話など、遠い遠い昔の事に感じる年代になっている私ですが…。

毎週、美章園駅から大和路線に乗って治療に通っています。下り階段が急なのと手摺がないので、いつも駅員さんの介護をうけておりました。ところが駅員さんの移動が多くて定まった方が見えずさびしい限りでした。が、神さまのおひき合せか、同じ曜日の同じ時間に治療に来られる奥さんと出会い、いっか言葉をかけ合っている間に天王寺駅から乗車なさるとの事。月日が流れ「今日も又ご一緒でしたネ」とか、病気治療の事など話をしているうちに、私は下り階段の時には、駅員さんに介護していただいている旨、お話しましたら「そんな事ぐらいなら、自分も介護出来るから」と言って下さり、それ以来ご親切に甘えています。

同時刻に私は、美章園駅より乗車しホームに着く迄に姿を見つけ、両方から小さく手をふり合っています。恋人同志みたいな心ときめく一瞬、楽しいものです。一人で行く時は、空席があっても座る事なく、左側が空いていたら座っていましたのに、今では友と一緒と思うと真ん中あたりの空席にも座って行く心強さに、自分でも成長したなァと思っています。その奥様も「大分よくなってきている様子がわかり、嬉しいワ」と。人様に言われると私自信も力がついて来て喜んでいます。私にはエネルギー源と思い休まず通っています。

発病当時の寝たきりの事を思うと、自分一人で好きなものを買いに出られる事を本当に感謝しています。ちょっとした御縁で治療所を知り御親切な先生に出会い、今度は又、よいお友達に出会えた事を喜び、これからもよろしくと願っていますが、私も私なりに世の中に、何か御恩返し出来る事がないかと毎日心掛けています。

すてきな一日

中西利香

七月二二日（月）に秋篠宮殿下と同妃殿下が、大阪市身体障害者スポーツセンターを視察されました。

殿下と紀子さまが館内を見て回られて、私達の所へ来られました。私達は、体育館の半分を使ってローンボールをしていました。ちょうど、順番が私に回ってきたので上ってしまいました。

紀子さまが、お声をかけてこられましたので、私はお答えしました。

とっても色が白くてきれいな方でした。殿下は、おやさしそうに見えました。

私は、とってもすてきな出会いをしました。

ナンペイの ひとこと&ふたこと ⑫

親ゆずり

先々月のこの欄で、特急で一目散に目的地に着くことより、むしろ急行ぐらいに乗ってゆったりゆっくり旅を楽しんで行く方が好きだ、という意味のことを書いた。

そのときには思い付かなかったが、サロン紙を手にし改めて自分の文章を読み返してみて思い出すことがあった。

もう三〇年ほども昔のことになる。毎年という訳ではないが、夏休みになると両親の故郷である福井県の敦賀に帰省することが多かった。仕事の都合もあり大抵の場合父は後から一人で来る事になり、母と姉と私の三人が先発隊として出掛けることが普通だったように覚えている。

今では大阪から敦賀までは、特急で二時間掛かるかどうかと言うぐらいに「近く」なった。三〇年ほどまえの当時でさえ三時間あまりもあれば行ける、それぐらいの距離である。ただ確かなことではないが、そのころはまだ北陸線には特急列車が走っていなかったような記憶があって、そんなに多くもなかったろう急行列車もSLやディーゼル機関車が引っ張っていたようだ。

それはともかく、母は夏休みになり帰省する時期が近付くとよく言う事があった。

「ことしも敦賀、どんこうで帰ろな」

「どんこう」すなわち各駅停車の列車のことである。今から思えば、よくもまあ五時間近くをかけてでも敦賀まで行く列車が都合よくあったものだと、感心もする。そして母もよくこんな列車を見つけ出したものだ。母にしてみれば、いくら速くても混み合う急行よりすこしでも空いていて楽に乗れることが先決問題だったのだろう、姉を連れ私を背負い荷物も持たなければならないのだから。

こんな風に書けば、何やら悲壮観が漂いそうになるが私の母にはそういったものは余りなかったように思う。もちろん、まだ一〇歳前後の子供の眼から見たことだから大人の気持ちの深いところまでは見えなかっただろうが、まるで貸し切りのようなガラ空きの車両に家族三人でのんびり座り止まる駅ごとの名所旧跡の説明をしてくれたり、自分も好きな駅弁を姉に買いにやらせて食べたり、律儀に一駅一駅止まりながら故郷へ近付くていく汽車の旅を心から楽しんでいる母の姿を、当時の私はしっかりと見ていたようだ。

三〇年の歳月が経ち、今の私は「特急」よりも「急行」、「急行」よりも「どんこう」で行く旅のほうがとても好きである。

南光龍平

Volunteer Center 4

三　今後求められるボランティア像

いまやボランティアという言葉は非常に一般的になって、ほとんどの人が知っているものとなったが、その言葉のさす内容は一人ひとりでかなりの違いがある。

主体性、連帯性、無償性といった基本的な性格は捉えられているとしても、日常の近所同士の助け合いをボランティアという人もいれば、それはあたりまえのことなのでボランティアではないという人もいる。

ボランティアの定義もいろいろあるが、最も厳密な定義としてあげられているものとしては、「市民が、自分の親族とか職場の同僚、その他自分が所属する各種の任意団体の会員以外の市民のためにも役立つ非営利的な労力提供をその活動への参加および活動内容の選択について組織的拘束を受けず、徹底して自発的意図的に、労力にみあう報酬をえずに行うことであり、しかもその活動が特定の公共公益施設の管理者または特定対象者の了解のもとに、ある程度継続的に行われること」と難しい。これをみると、ボランティア活動は必ずしも、いつでも、どこでも、誰にでもできる活動とは言い難いように思われる。

今日、ボランティア活動が推進されている中では、活動の範囲を先の定義のように限定せずに広く捉えて、地域における相互扶助がボランティアという言葉ですすめられているという面がある。もちろんボランティア活動が拡大することは良いことなのであるが、ボランティアの意味がすべての人に正しく理解されているとはいえない状況で相互扶助の側面ばかりが強調されることは真の意味でのボランティア活動の発展にとってはむしろマイナスといえるかも知れない。「ボランティアには難しい定義が多すぎる」という批判もあり、それも確かに一理あるのだが、ボランティアという言葉が一般的になったいまこそ、本来の意味を確認しておくことの重要性は高い。

ボランティアの本質は「自由意志と自発性」だといわれている。こうした「自由意志と自発性」に基づいた活動は社会のさまざまな問題に対する問題意識によるものであり、それを変えようと取り組むエネルギーによるものなのである。

このような活動をすすめるには、問題意識や取り組みのエネルギーをもつためのボランティアの「主体形成」をどう実現していくかが重要な課題となってくる。

これから検討するボランティアセンターにおいては、この「主体形成」をすすめる機能が保障されていることが求められる。

原田　仁

古本屋めぐり

実際、ぼくには趣味らしい趣味はなかったのである。音楽観賞は、隣人のイビキさえ聞こえる木造アパートに十数年来生活している結果、完全に過去の趣味となってしまった。読書は趣味というにはあまりに平凡だし、だいいち、ぼくの読書は半分仕事の延長だから苦痛が伴うことも多い。だから、なにか考えるだけでストレス解消になるような、そんな趣味がほしかったのである。

そこで最近、おもしろく思っているのが古本屋である。とくに古本即売会という数軒の古本屋が合同で開く古本市には掘り出し物が多く、土曜日などは事情が許すかぎり行っては三、四時間過ごしてくる。

一冊百円といっても文庫本だけではなく、数年前には数千円で売っていたような本でも百円で売っている。二千円でも普通の本屋なら一冊しか買えないのに、古本市なら両手でかかえるほどの本が買えるのである。

知っている人は前から知っているのだろうが、こういう古本市の魅力は、ぼくの最近の大発見のひとつで、市の日が近付くとなんだかわくわくしてくるのである。

古本の魅力は安いだけではない。見たこともないような本がたくさんあるのである。だいたい新刊書はすぐに絶版になってしまって、いまはどこの本屋に行っても同じような本しか置いていない。ぼくは知らない街にくると、まず第一に本屋をのぞいてみるのが習慣だった（いまはもちろん古本屋の物色を優先している）が、どんな本屋も似たりよったりなのでつまらない。ベストセラーなら、どこの本屋にもあるが、そうでない本はなかなか見つからない。その点、古本屋はどの店に入っても違う本が置いてある。何軒、古本屋をまわっても飽きないのは、そのためである。

戦時中の本で、児童向きの偉人伝のシリーズで『ヒトラー』の伝記が七百円で売っていたときには、迷わずに買ってしまった。戦時中と戦後とでは、もちろん本の内容も大きく違ってくるが、ソ連の共産主義を賛美するような本が珍しくなかった六〇年代と、社会が保守化しはじめた八〇年代の本は、また違うのである。

戦時中に侵略戦争を美化した本は今から見れば実に恥ずかしい本だが、二千万人もの犠牲者を出していたスターリンの政治を誉めたたえた本も別の意味で恥ずかしい。その恥ずかしさをそのままにして、なおも著者の現在の意向にかかわらず売られている古本の姿を見ると、本を書く人間にとっては古本屋は本当に執念深く残忍な一面をもつ商人だと思う。

このサロン紙にしても、小さなニュースレターにすぎないが、毎年のように賞をとり多くの人の注目を受けているようだ。社会福祉専門の資料室をいくつか訪れると、このサロン紙のような小さなニュースレターもきれいに保存されていることが多い。

まさか古本市で、このサロン紙を見つけることはないだろうが、十年二十年たって、資料室の机に座り黄ばんだサロン紙を読む人が現われるかもしれない。そのとき読者に言い訳しなくてすむような、恥じないでその場に居られるような、そういう文章を書きつづけられたらと思う。（知）

美智子のこんな話

岸田　美智子

スウェーデン生活体験記

2

この旅行のメンバーはすべて全国公募。希望者は一〇〇人以上でとても多かったそうですが、事務局の選考でたまたま選ばれた介助者と障害者がペアになりました。

障害者のメンバーは、CP、ポリオ、ケイツイ損傷、発達遅滞障害など車椅子八台（この中には、福祉の分野では有名なジャーナリストである大熊一夫さんもおられました。その理由も次回からのお楽しみに……？？？）を含む障害者十三名、介助者七名、事務局六名の合計二六名でした。

私は、海外旅行はこの旅行が全く初めての体験でしたし、四日以上の長い旅行も初体験でした。それに、スウェーデン語は勿論、英語も話せないし体力的にも自信がないし、おまけに介助の面でも心配でした。

でも、通訳は同行してくださるし、私の介助者は岡山県の肢体不自由児養護学校の高等部へ八年間勤務されている先生で、三五歳・女性のTさんと、事務局の方から連絡があり決っていましたので、私は踏み切る事が出来ました。それに、事務局に「十五日間という長い間、着替え、トイレ、食事、お風呂などと、介助量が多い私を一人で介助するのは無理だ」と思うと相談した時、「こちらでも手伝うし、それにもう一人介助者を付けるのは、今からでは無理だし、岸田さんぐらいの障害者をどう受け止めてくれるのか、その対応ぶりを見るのも今回の旅行の目的でもあるからね。もし、岸田さんが困るようであればスウェーデンの福祉もたいしたものではないという事だから……。」などと言われたので、私もなぜか居直ってしまい参加する事が出来ました。

成田空港からスウェーデンのアーランダ空港まで、昨年出来たばかりの直行便で約十一時間。日本との時差は七時間です。

十一時間という長さには疲れるだろうなぁと思っていたのですが、窓の外の景色（シベリアやソ連の上空）やみんなと話したりしていたし、機内食が二回も出てきたりして往復ともアッという間でした。

機内のスクリーンでは、映画をやったり地図上で飛行機の位置を刻々と表したり、スピードや外の気温などもそのつど映し出されていました。それによると、スピードは八〇〇キロメートル以上出ていたし気温もマイナス六〇度ぐらいにもなりました。

窓の外の信じられないほどゆっくり流れていく雲や景色を見ながら、世界は一つなのだなぁと思わず実感していました。

アーランダ空港に着いた時は、気温四度。スウェーデンでも五月にしては何年ぶりかの低い気温で、はく息が白く見えました。私は持って行った冬の上着を、この旅行中の外出には着ていました。夜は十一時を過ぎてもまだ、少し明るいのでした。白夜に近いのです。日本と同じように夜遊んでいて、フッと時計を見ると十時前なので、こんなに明るいのに…この時計故障かなぁと思ってしまう事も有りました。

阿倍野区身協が四〇周年記念大会

阿倍野区身体障害者団体協議会（赤松憲二会長）は、今年・四〇周年を迎え、これを記念して九月二九日（日）午後一時より「結成四〇周年記念大会」を阿倍野区役所二階の区民ホールで開催します。

同区協議会は、昭和二五年末に視覚、聴言、肢体の三障害者福祉団体が集って発足し、現在では会員数二五〇名を数えます。

同会ではこれまで大阪市盲人協会の会長・堀川弘氏をはじめ多数の役員を上部団体に派遣し、身体障害者の福祉向上に貢献してきました。

今回は、四〇年の節目を迎え、それを記念して記念大会を開くことになりました。

大会では、西尾祐吾　武庫川女子大学助教授（元阿倍野区福祉事務所長）の講演、新人歌手の歌謡ショー、障害者の作品展、お茶会等多彩な行事が予定されています。

九月「日曜サロン」のご案内

第二回目の花の第五日曜日の出会いは、阿倍野区身協の四〇周年記念大会に参加します。区身協の会員（会員は各自に招待状が発送されます）以外の方で、参加希望の方はお申し出下さい。皆様と共に阿倍野区身協の四〇周年を祝い、多彩な催物を楽しみたいと思います。

日時＝平成三年九月二九日（日）
午後一時開会（受付十二時）
場所＝阿倍野区役所二階区民ホール
（車椅子トイレ・エレベーター有り）
［大阪市阿倍野区文の里一－一－四〇］
内容＝阿倍野区身体障害者団体協議会
四〇周年記念大会
○式典・講演・歌謡ショー等
○身体障害者作品展・お茶会等
申込み先＝TEL〇六－六九一－一〇二八。
（冨田迄）
申込み締切り日＝九月二〇日

おしらせ

九月の出会い
日時　平成三年　九月二一日（土）
午後一時～四時
場所　育徳コミュニティーセンター二階研修室［スロープ、車椅子トイレあり］大阪市阿倍野区阪南町五－十五－二八
内容　「がんばれ　リサイクル」
パネラー　阪大基礎工学部助手　森住明弘氏
会費なし
問い合わせ　TEL・06-691-1028（冨田慶子）

＃感謝します＃

カンパ・冊子・はがき・カセットテープバザー用品等ありがとうございました。お礼を申し上げます。

尚、七月にバザー用品をご寄贈いただきました皆様方のお名前は次号にまとめて掲載させていただきます。

七月のカンパ　金八、〇〇〇円
笠原美和子、栗野利秋、小泉田恵子、杉山蔦枝、丸山寿美子、
匿名三名様（敬称略）

「これ、ください。」

セピア色した表紙には、草花の密やかな囁きとやさしさが花籠いっぱいに描かれています。

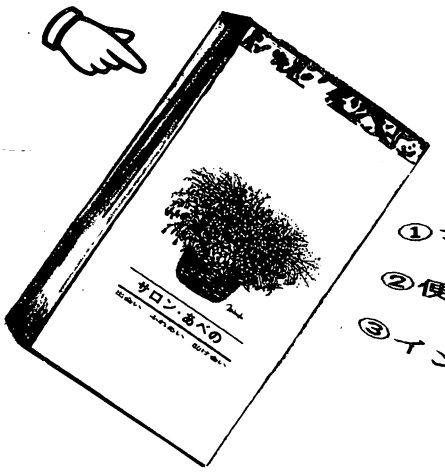
中紙は、淡いクリーム色の地に手がきの「月・日」と罫線がブラウンカラーで印刷されていて、システム手帳のスペアー用紙にも使用出来る大きさになっています。

ペンすべりのよい高級紙を使っています。

出会いの楽しさ、一言の言葉の喜びを伝えてくれる《メモ帳》。

「サロンの《メモ帳》」と言ってお求めください。

○1冊（100 枚綴）・・￥150.



①システム手帳にも使えます

②便せんにも使えます

③インクがにじみません

一九九一年八月二四日発行（毎日発行）KSKP通巻一七二八号一九八四年八月二〇日第三種郵便認可
発行人＝関西障害者定期刊行物協会＝大阪市城東区中浜二－十－十三福橋ビル2F・アド企画気付

<サロン・あべの>第６２号　　編集：サロン・あべの　運営委員会　定価 100円
（〒545 大阪市阿倍野区阪南町６－３－２６．電話０６－６９１－１０２８冨田慶子）
印刷；セルフ社〒545 大阪市阿倍野区西田辺町２－２－１０－１０１．TEL.06-691-2365.